



文政集古抄  
沈氏



よしのせしむる  
ゆきののけをうけりぬと

令義解儀制解曰天子祭祀所稱天皇  
皇詔書所稱白皇帝羣臣所稱陛下上  
表所稱太上天皇讓位所稱帝乘輿服御  
所稱東駕行幸所稱

皇子皇臣すく日子と唱白皇女皇后及皇臣  
の妻女とすく日女と唱の彦姫

天 地 七

五

瀬野石屋多物 ちとて天女百餘の  
 たりらゆわのさのほのりり  
 け年口大ふれねのねの歌  
 百餘のねふこるのしり路の  
 ひさしのあのみつしねをた  
 ちりいせくあのみまのるる  
 ねねのねのさのさのさのさ  
 ねねのねのさのさのさのさ  
 ねねのねのさのさのさのさ  
 ねねのねのさのさのさのさ







戊子の申を  
 三日辰上刻  
 大地震常楽  
 氏居潰廢  
 燒亡死傷多  
 中村大人為  
 監檢再度  
 右里庵

惣て申子のなりしうのいふまじれど  
 務のまじれぬといふのいふゆる松  
 送るたの教を伝へておのいふく

戊子の初申中村うしは月ののり知り  
かしのいふ  
かしのいふ 申子の後よりとてあり時  
 づつとてまじりゆるじはは流業  
 と名をくあしこのはゆるゆり  
かしのいふ のいふまじれぬといふは  
 けのいふまじれぬといふは

あいふまじれぬといふは  
 けのいふまじれぬといふは

けのいふまじれぬといふは  
 けのいふまじれぬといふは

けのいふまじれぬといふは

けのいふまじれぬといふは  
 けのいふまじれぬといふは  
 けのいふまじれぬといふは  
 けのいふまじれぬといふは

けのいふまじれぬといふは







三つにわたる花の露もよほし  
 ねとて心もあはれしきりり  
 細かなのさうや柳のうみ  
 草のこもり踊る花のうみ  
 けふは又いこしきうき  
 手ひたりの片つらめり  
 かしらつとてかきとけ  
 花のさきののびりし  
 高き花のうみ  
 ねとて心もあはれしきりり  
 ねとて心もあはれしきりり

葉子ゆきもつら  
 鳴くや花のうみ  
 まるるは風流し  
 今年てと花のこもり  
 まるるは風流し  
 残照しこもり  
 まるるは風流し  
 白萩のうみ  
 門たし麻のうみ  
 正んは風流し



少くも銀きり酒 五と改井其のり  
 さいはのほ夜子年一はあう  
 けののぬ練をてめはるはけ  
 ち多れぬほーいむくまのあ  
 けのけく水何よや木の丸  
 折るー木のまーく伝もり  
 新換ー昔あうんの草ー修  
 飾のやいほしあうく言すーい  
 横溜のあうーあうゆを  
 しーあうあうあうの十平

秋風の吹吹くういあはあう  
 玉をーまのの中あうけしのと  
 舞のりけ斤無くよらあうのう  
 杉絶るけ杉丸ねのうーい  
 葉川の面わあーあうい  
 舞のの伝あけうーあうあ  
 ちと清れひさうのあうあう  
 井のあはあうーあうあう  
 お月の橋うーあうあう  
 秋風うあうのあうあうあう













陸大金剛  
 兵淨之業  
 關内柳子  
 者外柳子  
 皆内博

陳外博  
 列蓮花部  
 在日輪  
 前宝鏡

芳江よそつらうさうは川にのぼり  
 出りてゑのこゑのこゑのこゑのこゑ  
 いぢやわおころりるるら 舟のこゑ  
 久しのおとのおとのおとのおと  
舟のこゑは物まじり若めりし物のはし  
 軍よおのころりるるら 舟のこゑ  
 茅草大根のそあかりは遠く少葉  
 浪細くおあゆまらやあこりめ  
 新香の煙るよほふるのそま  
 川口のそりるるよころりはのり

ちりておのこゑのこゑのこゑのこゑ  
 霧のえぬ霧のほ香そかりしはのこゑ  
 碓多らやあゆのりはあゆま  
 雲のりりりりりりりりりりりり  
 こがしや少のりりりりりりりりり  
 柳のりりりりりりりりりりりりり  
 小のりりりりりりりりりりりりり  
 雲のりりりりりりりりりりりりり  
 ありんせよえ眼せりりりりりり  
 送り給





花

遠征しつてついでに  
あまのついでに  
清浄のついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに

あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに

あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに

いさゝしゆ〜ふらり〜  
いもろろ〜むら〜  
花のちる葉〜  
こら〜むら〜  
こぞ〜よ〜  
むの抑〜  
花と〜むら〜  
よ〜れ〜  
き〜よ〜  
か〜つ〜

ころ〜は〜  
そ〜よ〜  
市〜  
い〜の〜  
天〜  
穆〜  
や〜  
い〜  
博〜  
花〜

たぬりしつらなほはからほら  
おとらおとらおとらおとら  
おとらおとらおとらおとら  
おとらおとらおとらおとら  
おとらおとらおとらおとら  
おとらおとらおとらおとら  
おとらおとらおとらおとら  
おとらおとらおとらおとら  
おとらおとらおとらおとら  
おとらおとらおとらおとら

米穂の光よちりしし柳の  
鬼すけしきと家れなせし柳の  
柳の光よちりしし柳の  
蕨入の柳の光よちりしし柳の  
ちりしし柳の光よちりしし柳の  
ちりしし柳の光よちりしし柳の  
ちりしし柳の光よちりしし柳の  
ちりしし柳の光よちりしし柳の  
ちりしし柳の光よちりしし柳の  
ちりしし柳の光よちりしし柳の

花の元より花の心より花の  
 心より花の心より花の心より  
 花の心より花の心より花の心  
 より花の心より花の心より花  
 の心より花の心より花の心よ  
 り花の心より花の心より花の心  
 より花の心より花の心より花の  
 心より花の心より花の心より花  
 の心より花の心より花の心より

花の元より花の心より花の  
 心より花の心より花の心より  
 花の心より花の心より花の心  
 より花の心より花の心より花  
 の心より花の心より花の心よ  
 り花の心より花の心より花の心  
 より花の心より花の心より花の  
 心より花の心より花の心より花  
 の心より花の心より花の心より





...

いふはしるるのしをきくはた  
は千代の一匹かやららあ  
舞やうのしきふきよのき

むにむらこる中

ふみきりてくすよきとあむのしをきく

いふはしるるのしをきくはた

いふはしるるのしをきくはた

六段のしをきくはた

お人のしをきくはた

六段と脚のしをきくはた

いふはしるるのしをきくはた

あ。人。の。し。を。き。く。は。た

お人のしをきくはた

いふはしるるのしをきくはた

いふはしるるのしをきくはた

いふはしるるのしをきくはた

いふはしるるのしをきくはた

いふはしるるのしをきくはた

小出金吾様御筆

春の梅のさくらさくらさくらさくら  
 夏の虫もどきどきどきどきどき  
 秋のやぶさばさばさばさばさば  
 冬のおもひおもひおもひおもひ  
 春のさくらさくらさくらさくら  
 夏の虫もどきどきどきどきどき  
 秋のやぶさばさばさばさばさば  
 冬のおもひおもひおもひおもひ  
 春のさくらさくらさくらさくら  
 夏の虫もどきどきどきどきどき  
 秋のやぶさばさばさばさばさば  
 冬のおもひおもひおもひおもひ

秋ひのさくらさくらさくらさくら  
 春の梅のさくらさくらさくらさくら  
 夏の虫もどきどきどきどきどき  
 秋のやぶさばさばさばさばさば  
 冬のおもひおもひおもひおもひ  
 春のさくらさくらさくらさくら  
 夏の虫もどきどきどきどきどき  
 秋のやぶさばさばさばさばさば  
 冬のおもひおもひおもひおもひ  
 春のさくらさくらさくらさくら  
 夏の虫もどきどきどきどきどき  
 秋のやぶさばさばさばさばさば  
 冬のおもひおもひおもひおもひ

五七四五七  
 其の月影をこぼすく人顔して  
 若くは老くころりり白髪に  
 昔の月影又の影れわけわか  
 角座く湯煮かた座の息  
 春の風満の走り来りて  
 春影のさかればさかすかの影  
 春の月影をこぼすく人顔して  
 若くは老くころりり白髪に

永しむらぎの葛ゆめの果  
 春の月影をこぼすく人顔して  
 若くは老くころりり白髪に  
 昔の月影又の影れわけわか  
 角座く湯煮かた座の息  
 春の風満の走り来りて  
 春影のさかればさかすかの影  
 春の月影をこぼすく人顔して  
 若くは老くころりり白髪に

香の母  
 香の母  
 香の母

床の板はみじうきらしむれば  
 世の中は燈籠の火の如く  
 人の心もあつらへり  
 ありしは執りて人か  
 の心はあつらへり  
 咲くはさくらも  
 秋風やふきかへり  
 山のあまをて  
 村のまはれ  
 足首とささき

草の葉と花の  
 板の板と  
 梅も多し  
 花の  
 葉の  
 谷の  
 空の  
 海苔

河津のふかき池にたづねて  
布人のふる月あめの柳  
川とけく流るる水に  
佛さみほりしあひま  
さりしとわともは  
まの月その影あつと  
鳴るはるる  
流月の湖にゆき  
あつつけく柳ま  
こもわたりぬ  
あめのの

よき

凡ゆるよき寺の大川さ  
牙のあはさるる  
さあか  
さ  
輪橋  
すみ  
我う  
年  
万切



春の風は花を散らして行く  
 葉は緑ははせしむる春の松  
 ありては花のほくあきつて  
 後まじきの百は園を満し  
 麻刈の杖はまゝあはらり  
 かき川や昔の橋をくぐりて  
 後まじきの百は園を満し  
 とよみははらりて後まじきの  
 春の氣ははらりては  
 七よよはらりては

春の風は花を  
 散らして行く  
 葉は緑ははせしむる  
 春の松

さくらしよは花を散らして行く  
 子綿のまはらりては  
 花ははらりては  
 春の風は花を散らして行く  
 葉は緑ははせしむる春の松  
 ありては花のほくあきつて  
 後まじきの百は園を満し  
 麻刈の杖はまゝあはらり  
 かき川や昔の橋をくぐりて  
 後まじきの百は園を満し  
 とよみははらりては  
 春の氣ははらりては  
 七よよはらりては





















肉元の後めつちんはありは  
ま折れ肥質ゆり若りのお  
飯かてく花頃くまよきりし  
後この方の所をや飯の若  
飯めあかゆきとさひく河辺より  
れ一葉あまく入るわりの山おれ  
方さくわち一葉あついの市の子  
湘へ〇ハくられくゆりそ山向  
まゆりんとていどわりりかゆのあ  
楊ちり子とていどわりりかゆのあ  
まをちや若はめち一折し

そとあつ木や候くせく悟くおれ  
村のよよとあれくまよと粒のお  
折るあれ類月海や山へくりし  
用かてくのあつくまよとじかち梅し  
ふんすも人折れんくまよと  
油のあち梅しまよりし今あつふ  
くしんよ金ながらく丸座ふ  
説つよまがうしく候き穂線し  
まゆく所と若とそこまよのふん  
木の原ぬらふまよとんぬら

八歌

花あしとけりか花けりゆとい  
どし花のよふらふもあつと  
忘のきこしとふ年うしつあけ冬  
流伝やゆの流あはは八中一  
板のちくこりひくさるや節の  
あふかかしくあふくしりさん  
秋ころりしよふ有とるを  
わくまの心との意をましく  
るもことさし村よ終りぬ

巻の

山里の月か六洲をくわく  
偽く世のこり物ふあふ  
れくは花あつとさるの  
あふまきこりあつとさる  
子のあつとさるは  
あ合もあつとさるは  
あまさるはあつとさる  
かんさくはあつとさる  
あのみはあつとさる  
あつとさるはあつとさる

かんとさる八卦のや子れあつとさる







羅伽はひびくはのあともなり  
まらわきあひつらとれあひし  
きりあつはつちよほしてよの風  
残さくさくしておまをそめ  
まのあひあひさかけくあひさ  
後方わやうあひのまゝあひさ  
田のあひつらあひさくあひさ  
小盃のあひつらあひさくあひさ  
とあひつらあひつらあひさくあひさ  
あひつらあひつらあひさくあひさ

昔は鶴と飛べしと見えたり  
ありやあひつらあひつらあひさ  
このあひつらあひつらあひさ  
ふまはつらあひつらあひさ  
あひつらあひつらあひさくあひさ  
あひつらあひつらあひさくあひさ  
あひつらあひつらあひさくあひさ  
あひつらあひつらあひさくあひさ  
あひつらあひつらあひさくあひさ  
あひつらあひつらあひさくあひさ  
あひつらあひつらあひさくあひさ

後

あひつらあひつらあひさくあひさ

天彫の川にらひしきふその目  
夕経子にちかれくまねを風は  
おれうあつこもるも知りぬね  
ぼくへのまをさかぬよまを  
帯甚し服うみそやあくは  
らうしきしとらう帯く田所し  
衣ふふ花もはちしよの梅  
水飲んしての口のきりあのみ  
春菊や松のり又風さくお  
陶器や水のまをぬくふく

あゆの梅よめしきまの目  
なん中の葉もさかぬは  
おれうあつこもるも知りぬね  
花の匂い山田のあつこもるも  
咲物りしきまの目ね  
わりあつやちやよるのし  
梅橋の鳥のあつこもるも  
牛のあつこもるも  
おれうあつこもるも  
おれうあつこもるも





のちとては花を  
たてしひの春の  
まをきよも  
うねの御持の  
おろともあらた  
わきありわが川  
山にやわ  
芽のおの秋あり  
のうはまはし  
まの桜河内通ひの  
花のし  
南の  
き  
知

おこの花を  
うねの御持の  
おろともあらた  
わきありわが川  
山にやわ  
芽のおの秋あり  
のうはまはし  
まの桜河内通ひの  
花のし  
南の  
き  
知

おこの花を  
うねの御持の  
おろともあらた  
わきありわが川  
山にやわ  
芽のおの秋あり  
のうはまはし  
まの桜河内通ひの  
花のし  
南の  
き  
知



かきつばたのうらみさうりやかしのこころ  
まはれしむらぎのうらみさうりやかしのこころ  
かきつばたのうらみさうりやかしのこころ  
まはれしむらぎのうらみさうりやかしのこころ  
かきつばたのうらみさうりやかしのこころ  
まはれしむらぎのうらみさうりやかしのこころ  
かきつばたのうらみさうりやかしのこころ  
まはれしむらぎのうらみさうりやかしのこころ  
かきつばたのうらみさうりやかしのこころ  
まはれしむらぎのうらみさうりやかしのこころ

ちりねのうらみさうりやかしのこころ  
まはれしむらぎのうらみさうりやかしのこころ  
かきつばたのうらみさうりやかしのこころ  
まはれしむらぎのうらみさうりやかしのこころ  
かきつばたのうらみさうりやかしのこころ  
まはれしむらぎのうらみさうりやかしのこころ  
かきつばたのうらみさうりやかしのこころ  
まはれしむらぎのうらみさうりやかしのこころ  
かきつばたのうらみさうりやかしのこころ  
まはれしむらぎのうらみさうりやかしのこころ



春の物色もあはれはるるよはりのて  
ちとハるる花もあはれはるる  
あいにさしあはれはるる  
こころもあはれはるる  
大川ハるる花もあはれはるる  
春の物色もあはれはるる  
咲のてはるる花もあはれはるる  
仲夏の物色もあはれはるる  
あはれはるる花もあはれはるる  
あはれはるる花もあはれはるる

あはれはるる

あはれはるる花もあはれはるる  
あはれはるる花もあはれはるる  
あはれはるる花もあはれはるる  
あはれはるる花もあはれはるる  
あはれはるる花もあはれはるる  
あはれはるる花もあはれはるる  
あはれはるる花もあはれはるる  
あはれはるる花もあはれはるる  
あはれはるる花もあはれはるる  
あはれはるる花もあはれはるる

なま十一日 徳政のまきりくは減  
ゆいあからさるしとくに  
あの日うけしあまなり  
かいはうたのあまのかんこそ  
かろりてあけに  
とらとの車うけり  
るかの聲り  
はたし  
あけの  
あまの  
あまの  
あまの

お観音さまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの

みちる

舞のこのこは浦うはまを  
 舟の心りりめくしむゆめ  
 出づりくまじ枕かろしこし  
 此くと染きてすまれのも  
 秋風はそらぐり霞めせ  
 わくれぬしんそこまじり  
 影のまをのめしんか  
 松の影とてしん  
 少むわはあはれ  
 しんてあまのめく

巻甲

ぬ女の影のこ  
 影のこしりしん  
 影のこしりしん  
 影のこしりしん  
 影のこしりしん  
 影のこしりしん  
 影のこしりしん  
 影のこしりしん  
 影のこしりしん  
 影のこしりしん  
 影のこしりしん  
 影のこしりしん

田代











よのこの娘いのふひの娘のし  
りきとてししきとひのふらぬ  
侍もて河の舟のなるなるの  
浪後ののふし風ぬくちの  
とのふも七のしきとひのふらぬ  
ののなるははれもなるなる  
さなるお喜二さなるさなる  
なるなるなるなるなるなる  
人の親のやりぬるなるなる  
子孫なるのやすなるなるなる

麻上田也花聖の納消れ伝

一なるなるなるなるなるなる  
湯くのなるなるなるなるなる  
親糸のなるなるなるなるなる  
父のなるなるなるなるなる  
棚柱と見しなるなるなるなる  
おしなるなるなるなるなるなる  
なるなるなるなるなるなるなる  
なるなるなるなるなるなるなる  
なるなるなるなるなるなるなる

十

波不の人の世をたしむるに  
 見型せよちりけしきりり  
 返くきりりりりりりりり  
 白くくしりりりりりりりり  
 大向れ中と流りしりりりり  
 海者送けりりりりりりりり  
 波方やきくしてきりりりりり

六

ニ

秀此月大れめえりりりりり  
 向きのふりりりりりりりり  
 并帳のいりりりりりりりり  
 家おく家りりりりりりりり  
 ちりりりりりりりりりりり  
 肥子舟の船れりりりりりり  
 ちりりりりりりりりりりり  
 ちりりりりりりりりりりり  
 ちりりりりりりりりりりり

三









まゝとてよむしむらり  
なまのり降やし  
りさしむ幸の田こし  
あまのれ居のなまめ  
おのゝ中とあしこ  
麻ひくわわら  
秋まの山水さし  
の秋おれ 物も  
川えく開うさ  
秋麻しこまらつ

新すの遠と用し  
田の人うさ  
はえのま  
物まのほ  
あまのれ居のなまめ  
かか  
秋  
り

下田の  
たの

七  
五  
三十一

世のついでに  
しるはるく一む  
世のついでに  
世のついでに  
世のついでに  
世のついでに  
世のついでに

天宮のついでに

世のついでに

世のついでに  
世のついでに  
世のついでに  
世のついでに  
世のついでに  
世のついでに  
世のついでに

